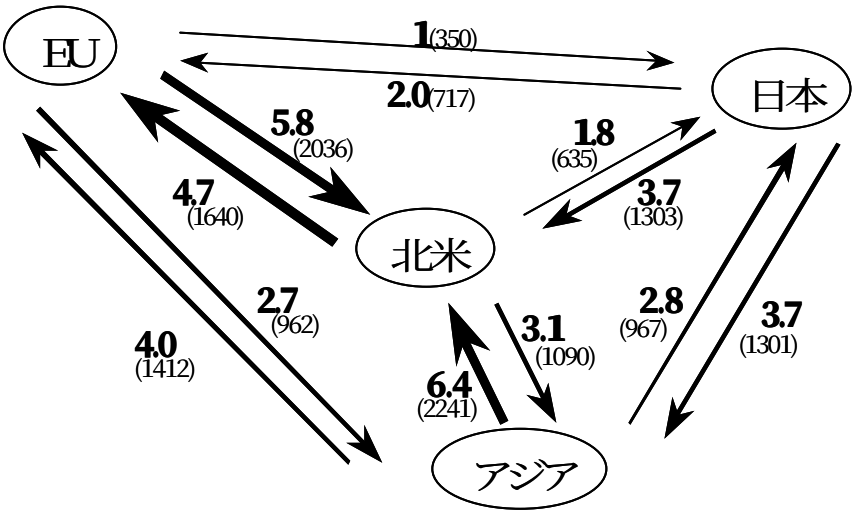
２ 北米、EU、東・東南アジア及び日本の間のモノ・人・情報の動き

・世界各地域間の財の貿易フローはＥＵ－北米間の動きが大きい。また、コンテナ海上荷動きは東・東南アジア発が大きく、東・東南アジアが「モノ」の世界経済を支えていることがわかる。
・人の動きはＥＵ－北米間、東・東南アジア－日本間が大きいが、電話通信量やインターネット上のリンク数などの情報面の動きはＥＵ－北米間の結びつきが強い。

（１） モノの動き

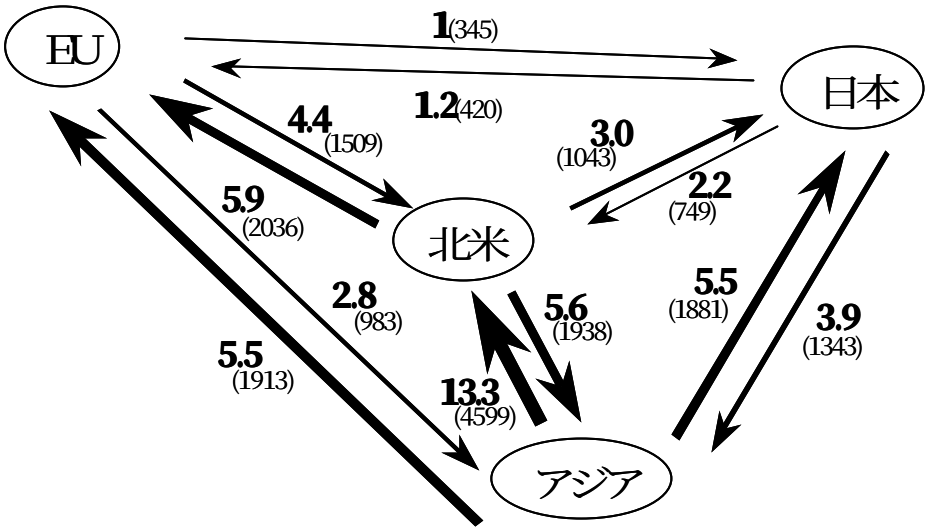
１９９８年における北米、ＥＵ、東・東南アジア(以下「アジア」という)及び日本の各地域間相互の財の貿易フローを見ると（図１）、好景気下にある北米はいずれの地域に対しても入超となっている。また、世界のコンテナ海上荷動き量を見ると（図２）、アジアがいずれの地域に対しても出超となっており、アジアが「モノ」の世界経済を支えていることがわかる。我が国についてみるとコンテナでは入超、財は出超となっており、バルクの荷動きは考慮に入れてないものの、我が国の輸出が高付加価値の製品中心であることが示されている。

図１ 財の地域別貿易フロー（1998年）



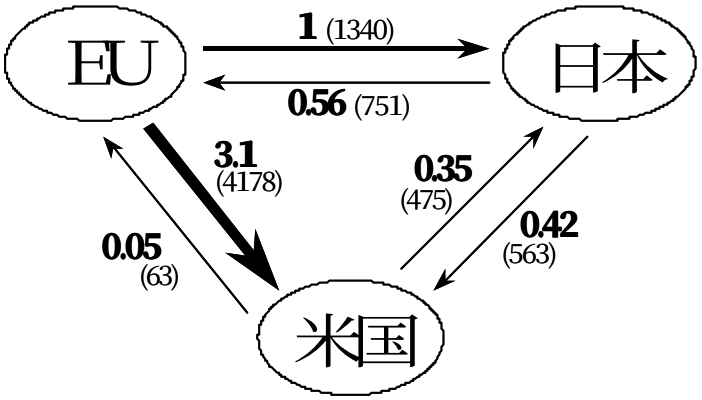
注)Direction Of Trade Statistics(IMF) より作成
350億ドルを１として指数化
カッコ内は原数値 単位：億ドル)
各地域の加盟国・地域は以下の通り
北米：アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ
EU：EU加盟国
アジア：中国、台湾、香港、フィリピン、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、韓国、ベトナム

図２　世界のコンテナ海上荷動き（1998年）



注）日本海運の現況（運輸省海上交通局）より作成
345,000TEUを１として指数化
カッコ内は原数値（単位：千TEU）
各地域の加盟国・地域は図１に同じ

参考）日米欧３極間の国際マネーフロー（1999年）



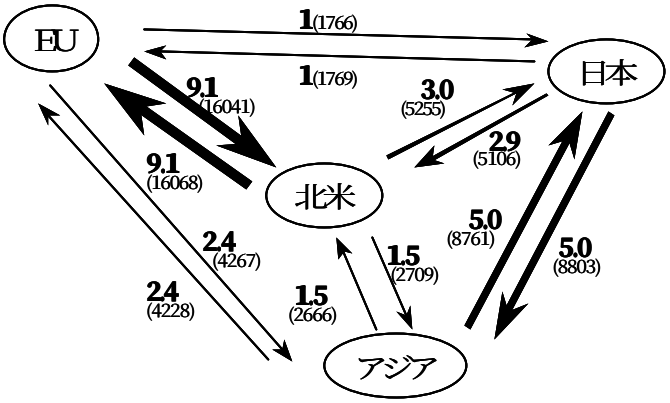
注）日本興業銀行資料より作成
1340億ドルを１として指数化
カッコ内は原数値（単位：億ドル）

（２）　人・情報の動き

世界各地域間における航空旅客の動きを見ると（図３）、日本－アジア間、ＥＵ－北米間において旅客の動きが大きくなっている。ただし、日本－アジア間、日本－北米間の航空旅客が日本発の観光目的中心である一方、北米－ＥＵ間の旅客の移動目的がどのようになっているのかは今回の調査ではわからなかったことから、さらに調査を深度化していくこととしている。

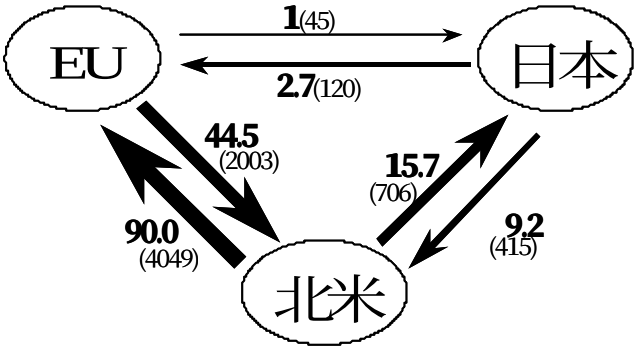
なお、ＥＵ、北米、日本の３極間における電話トラフィックと各ドメイン間のWWWリンク数を見ると（図４、５）、情報の行き来の面ではＥＵと北米の結びつきが特に強いことが明確であり、人の動きについても双方向の交流が進んでいることが予想される。

図３　地域別航空旅客の動き（1998年）



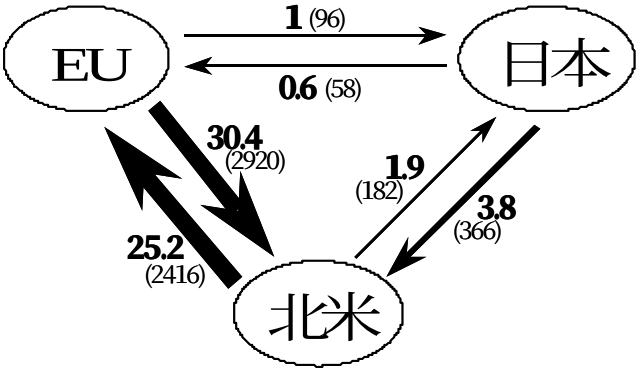
注）ICAO資料より作成
　1,766千人を１として指数化
　カッコ内は原数値（単位：千人）
　各地域の加盟国・地域は図１に同じ

図４　日米欧３極間の電話トラフィック



注）「OECD通信白書1999」より作成
　45,000,000分を１として指数化
　カッコ内は原数値（単位：百万分）

図５　各ドメイン間のWWWリンク数



注）「OECD通信白書1999」より作成
　96,000件を１として指数化
　カッコ内は原数値（単位：千件）